

2023年12月17日

「この方こそ神の子」

ヨハネによる福音書 1: 29-34

竹島 敏牧師

洗礼者ヨハネは「この方を知らなかった」が、天から霊が降ってイエスの上に留まるのを見、預言されていた神の子の到来を悟るのです。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ」と。この「世の罪」とは神の意志・み心に逆らっている状態をいいます。そして主イエスはあらゆる掟のなかで「隣人を自分のように愛しなさい」という掟が最も重要だと言われました。聖書全体がこの「愛」についての教えに収斂されており、神の意志・み心は、私たちが互いに愛し合うことによって神の国を形成してゆくことにあると言い切ってよいでしょう。そのような方向性から外れた行いや考えが罪なのだと言聖書はいいます。主イエスは「愛」から離れてしまう私たちに気づきを与え、神の意志・み心へと引き戻して正しく導くお方で、この意味において「神の子」であり、贖罪のための「神の子羊」であるとヨハネは言っているはずなのです。

ヨハネの二人の弟子は自分たちの師の証を聞いてイエスに従い、その一人アンデレは、兄弟シモン・ペトロをイエスに引き合わせました。主からケファ・岩と呼ばれたペトロはやがてキリスト教会の礎となっていったのですが、はじめからそうと見込んで彼を弟子にしたのではありません。主イエスはペトロの奥底に秘められた可能性を見出し召し出したのです。そして私たちに対してもペトロにしてくださったように、一人ひとりに秘められている可能性を見つめて呼び出してくださり、どの様な時もどの様なことがあっても決して見捨てることなく、私たちの可能性を見つめ続け呼び出し続けてくださるのです。それこそがペトロをケファ・岩と呼び続けた主の招きなのです。